

「新通夜物語」覚書

穴 倉 玉 日

大正三年十二月十六日、鏡花の伯父・松本金太郎がこの世を去った。享年七十二。鏡花の母鈴の兄で、中田猪之助（葛野流大鼓師・中田家三代）の三男とされる金太郎は幼名音吉、十四歳で宝生流の松本彌八郎の養子となって松本金太郎を名のり、幕府の瓦解後は徳川慶喜に随行して駿府に隠遁したが、その後東京に戻って能楽復興に尽力し、明治の能楽史に多くの足跡を遺した。金沢から作家をめざして上京後、当時神田猿樂町に居を構えた松本家を訪ねて金太郎と初対面を果たして以降、この洒脱な伯父を慕っていた鏡花は、親戚総代として松本方の縁者である日本画家・下村観山とともに「時事新報」の死亡広告に名を連ねた他、大正四年二月の『能楽画報』に「伯父」と題して金太郎との思い出を寄せている。

〈私の母と金太郎とが兄妹で、中田と云ふ葛野流の大鼓打ちの家から出た者だと云ふ事は、私も小さい時分から聞いて知つて居た〉（「伯父」という鏡花には、自らの血筋を意識してか明治二十九年

発表の「照葉狂言」以降、〈能楽もの〉と呼ばれる作品が数多くあり、中田家や松本家の人々が登場するものも少なくない。なかでも、金太郎の死から間もない大正四年四月に発表された「新通夜物語」（注1）は、その名の通り金太郎を思わせる能楽師の通夜の模様を描いた短編であり、鏡花を能楽師の家系からとらえる上で示唆に富む。本稿では泉鏡花記念館と金沢能楽美術館の共同企画展「鏡花と能楽」（平22・6・4〜9・26開催）における調査報告を兼ね、主に中田家・松本家とのかかわりから「新通夜物語」を読み解いていきたい。これから記すいくつかの視点が、今後の更なる考究のよすがとなれば幸いである。

一．描かれた人々―中田家・松本家

「新通夜物語」は先述の通り松本金太郎をモデルとする能楽師の

弔いに集った縁者たちの対話によって進行する。あらためて登場人物とそのモデルを確認すれば、まず故人である能楽師・上杉政忠が松本金太郎、政忠の甥・萱原松吉が鏡花、その妻・お光が泉すゞ、政忠の息・篤が松本長、その妻・お悦が松本ふみ、篤の姉・お常が松本たね、松吉の従姉だというお米が中田かね、そしてお米の姉・お組が中田ふみ、松吉の叔母でお組・お米の母が中田ちよということになる（注2）。

物語は松吉をはじめとする縁者たちによる一族の過去の追憶——特にお組・お米姉妹を中心とする思い出話と、姉妹の母に譲られたという松吉の祖父愛用の鼓にまつわる話とに分けられる。舞台は桐ヶ谷（注3）帰りの上杉家。理由あって無沙汰をしていたお米は、一昨日の朝だという政忠の死をようやく今朝の新聞で知り、通知がないのを気に病みながらも横浜から駆けつける。松吉が死去の日のうちに出した葉書は転居していたお米のもとには届かず、宛先不明で戻っていた。かつて横浜の金貸に縁付きながらも老いた母に故郷で不自由な独り住まいをさせていたお米は、そのことで政忠から厳しく叱責されたことがあった。お常・お光・お悦らの合いの手を交えつつ、そんな政忠の思い出を語り合ううち、話は一人この場に居合わせていないお米の姉・お組に及ぶ。〈龍野の温泉〉で嫉妬深い夫・近蔵と暮らすというお組。故郷での幼少時代、松吉は優しく世話をしてくれる年上のお組に対し、彼女が母方の家系である事もあってか亡き母の面影を見ていた。松吉が〈和、英、数学の私立へ通った〉頃、お組は乱暴な夫・近蔵と別れようと逃げ出し、城下にある松吉

の家に匿われた事があった。しかし、お組は敢無く近蔵に連れ戻されてしまう。当時は橋南谿の紀行文に登場する〈市から八九里ある〉〈大川〉を越えた〈湊町〉のある資産家の愛妾であったお米のところに身を寄せていた叔母（姉妹の母）とともに、松吉は〈龍野の温泉〉までお組を取り返しに向かったものの、奪還はかなわず、お組は今も近蔵と一緒にいるという。

先にも触れたが政忠のモデル・松本金太郎は大正三年十二月十六日午後六時、腎臓炎のため死去している（注4）。その死亡広告が「時事新報」に載ったのは十八日、葬儀は翌十九日午後二時より青山斎場にて執り行われており、作中でお米が政忠の死をその翌々日に新聞で知ったとしている点、また会場を〈青山の斎場〉としている点に符合する。また、松吉が語る政忠との思い出は、その多くが「新通夜物語」の二ヶ月前に掲載された「伯父」（前記）の内容と重なる。例えば、政忠から家芸を継いだ篤の妻・お悦については、政忠が彼女を名前ではなく〈お嫁さん〉と呼んでいたこと、篤との婚礼時に政忠が〈やあ、お嫁さん一つ献じませう〉といきなり猪口を差し出したこと、〈倅が気に入ったのなら其で可し〉とあまり頓着しなかったことなどが披露されているが、これらは既に「伯父」において「打ち解けた結婚式」と題して、

すると正座に居た伯父が、突発的に「お嫁さん一杯いかう」と言つて自分の盃を花嫁に差した。始めて見た自分の倅の嫁、私が媒介の役で相談して立処に「お前達で可いと云ふのなら」と

一も二もなく承知したその花嫁に「一杯いかう」は頗る乱暴な遣り方のやうであるが、伯父のかう云ふ場合にさう云ふ打ち解けた遣り方をしたと云ふことは、あの伯父としては寧ろ当然なこと、然も決して無意義な、乱暴な振舞ではないことと考へて居たものだらう。

と、そのエピソードが伝えられていた。明治三十七年に鏡花を媒酌として行われたこの婚礼の様子は既に「七草」(明42・1)に描かれており、その時の花嫁の(婚礼の時に、文金で、ぼつと成つて、俯向いた初々しさ)「(新通夜物語)」は、当時の鏡花の書簡にも手書きのイラスト入りで残されている(注5)。

また、「新通夜物語」は、その執筆の契機ゆえか、ある意味彼のこれまでの(能楽もの)の集大成的な様相も有している。(能楽もの)の嚆矢である「照葉狂言」に次いで発表された「笈摺草紙」(明31・4)には、(慶応元年、上野の戦争にさきだつて、江戸は修羅の巷となる由、予め騒いだので、紫の一家は、両親と、兄と嫂、嫂は江戸の生でない上総のもので、嬰兒を持つて居た)(注6)と、中田家の帰藩の様子を思わせる一節があるが、「新通夜物語」でもお常がお米に對し、(お前の姉さんは、東京で生れたんでね、乳飲兒を抱いて、叔母さん(お米の母)が叔父さん(お米の父)や、松さんの其の二階に居なすつたと云ふ、御両親、私には祖父母さ、其人たちと連れ立つて、貴国へ行つたんだからね)と、やはり中田家の帰藩について語っており、この時モデルである鏡花の母鈴の兄・中田惣之助と

ちよ夫妻に乳飲み子がいたことが記されている。二作にわたつて触れられた(嬰兒)(乳飲兒)が、夫妻の長女・ふみを指すことは明らかである。中田ちよの戸籍を調査した新保千代子氏の報告(注7)には、お組のモデルである中田ふみは明治元年生まれとのみ記されているが、あるいは改元前の慶応四年生まれであつたかもしれない。

さらに先に引用したお常の言葉にあるように、「新通夜物語」では鏡花の祖父母、つまり中田惣之助や鈴、松本金太郎らの父母についても言及している。(松さんの其の二階に居なすつたと云ふ、御両親)とは、中田猪之助(明治三年に豊喜と改名)夫妻に他ならず、松吉の口からもお組を匿つた二階の(件の三疊と次の六疊と云ふのが、私にも、お米さん……お米さんにも、祖父さん、祖母さんが、老後を送つて鼓の稽古をした処)と語られている。この二階の二間に母鈴の老いた父母が寄寓していたことは、鈴が登場する他の鏡花作品でも度々触れられている。また、猪之助夫妻が鏡花が誕生する明治六年には泉家の二階で同居していたことは、鏡花を懷妊中に高岡へ出稼ぎ中だった夫清次宛に送られた鈴の書簡によつて確認されている。おそらく明治五年に御手役者への前田家の扶持が打ち切られたことが影響してのことであろう。

このように、これまでの(能楽もの)(あるいは(金沢もの))に陰に陽に書き継いできた自らの能楽師の家系——中田家・松本家を、より実際になぞらえるかのように描き出した「新通夜物語」において、やはりもっとも注目されるのはこれまでほとんど詳細に触れられることのなかつたお組・お米姉妹の生き様を写した点であろう。

前記の新保氏の報告によれば、明治十年の中田孫惣（惣之助改名）の死後、妻ちよが辰口に移転したのは明治二十三年六月二十七日、その後置屋を開業したとある。二人の娘のうち、長女のふみは同町の伊藤某方に嫁いでいる。また次女かねは東廓へ養女に入ったこともあるという。ふみは大正五年に四十代半ばで夫と離婚、翌六年に浄瑠璃の師匠とともに辰口を離れ、母ちよも同年十二月に横浜に去った。横浜には安島某と結婚した次女かねが八月から移住していた。また、辰口を舞台とする「海の鳴る時」を調査した小林弘子氏の論考（注8）では、筋向いに中田ちよの置屋があったとされる辰口の旅館松屋（現在のまつさきの前身）に戦後、横浜からゆかりの人物が訪ねてきた形跡があると伝えられている。ふみ・かね姉妹については、鏡花はその後「継三味線」（大7・1）や「卵塔場の天女」（昭2・4）で次のように言及している。

叔母は、田舎から出て、今は横浜の、娘が縁附いた家に寄食つて居るのさ。もう一人の娘と一所に――。

叔母には娘が二人ある。私たちの矢張り従姉妹で、皆な我々より年紀上だがね。横浜のは妹の方で、姉は、故郷に居て、おなじく縁づきさきで、叔母を貢て居ただけけれども、永年折合の悪かった、夫婦なかが、到頭去年の夏破裂して、姉が家を駈出して、一時行方が知れなくなつたんだから、妹夫婦が、横浜から故郷へ出向いて、あと片づけをして、お題目ばかりを称えて居た、老年の母者人、われ／＼には其の叔母なる人を連れて

来たと云ふのでね、

（「継三味線」）

――横浜の、えゝ叔母の娘、姉妹でね、……叔母の娘は可笑しいんですが、叔父は私なんぞ顔も覚えないうちに、今の墓に眠つてゐるんです。妹の方は――来る時、傍を通りました、あの遊廓で芸妓をして居て、此の土地で落籍されて、かなりの商人の女房に成つたんでしたつけ。何か商売上もくろみがあつて、地方を了つて、横浜へ出て失敗をしましてね。亭主も亡くなつて、自分で芸事を教へて居ました。茶だの、活花だの、それより、小鼓を打つてね、此の方が流行つたさうです。四五年前に、神田の私の内へ訪ねて来た時、小鼓まで持参して、（八郎さん一調を。）と云ふぢやありませんか。しかも許しものの註文です。（何、私と一調だ、可からう。さあ素裸に成りたまへ、一丁組まう。）と云つたもんだから。――勿論、年増だが、別嬪だから取組んでも可い了簡かも知れませんが……従妹め、怒つたの怒らないの、其切り出て来ない。……音信普通同様で――去年急病で亡くなりました。が其の節は、私は大阪へ行つて居ました。

あゝ、信州の姉の方ですか。――これも芸妓で方々を流転して、上田の廓で、長唄か何か師匠をして居る、此の方は無事で、妹の骨を拾つたんです。

（「卵塔場の天女」）

これらの作品に描かれた姉妹は、妹が横浜に縁付いている点、姉は地元で結婚したものの後に破綻している点などが共通しており、先の新保氏による聞き取りとも一致する。また、「新通夜物語」から「継三味線」「卵塔場の天女」へと書き継がれ、発表年が下るにしたがい、姉妹のその後の消息——姉妹の離縁や、妹娘と母の同居、妹娘の死など——が書き加えられている点で興味深い。勿論、これらが事実在即したものであるかどうかは、これを裏付ける更なる資料の出現を待たねばならないが、もし「新通夜物語」に描かれたように、中田かねが松本金太郎の通夜・葬儀に参列し、これによつてより鏡花との音信が密になったとすれば、鏡花の筆が度々懐かしい姉妹に向けられたことも不思議ではない。

伯父の死をきっかけに再び結ばれはじめた縁。「新通夜物語」で浮き彫りにされていった中田家の人々のその後を「継三味線」「卵塔場の天女」なども視野に入れたどつてみたが、同作によつて浮上した中田家にまつわる話がもう一つある。それは代々伝わるという鼓をめぐる物語である。

二．幻の鼓胴をめぐって

芸事と云へば、……鼓は何うしたらう。

波乱に満ちた人生をすべて〈芸事〉だというお米の達観した言葉からの連想で、家に代々伝わるという鼓胴のことを思い出す松吉。

彼が十一か二の頃、他家に譲られた鼓胴の話をお組から聞かされた松吉は、お組とともにその家を訪ねた。それは〈あなたの庵〉という名の蕎麦屋であり、松吉の祖父らと同じ能楽師——但し笛の家の成れの果てだという。蒔絵も模様もない鼓の胴は果たしてその家にあったが、泥にまみれた石菖鉢の台になっていた。

この鼓胴については、祖父の中田万三郎を実名で登場させていることで知られる「継三味線」でも触れられている。

「大事な鼓の事から話さう、若い時、万三郎と云つてね、……廉さんや私たちには祖父に当る、亡くなった私の父の親父、廉さんには母の親父でね、葛野流を打った爺さんが持つてたのさ。」

「あゝ、聞いて居る、万三郎と言ふ老人は、大鼓ぢやあ近世の名家だつたと聞くね。」

「血筋の事で、恐縮だがね、とに角打てたと言ふんだよ。……続いた大鼓の家だつたんだから、代々其の祖父さんまで持伝へた、織居の作の胴なんだがね、蒔絵の箱に、鈐と言ふ銘がある……（以下略）」

祖父の死後、廉（鏡花がモデル）の母が預かった鼓は、母の死により廉の叔母に当る姉妹の母（中田ちよがモデル）に譲られたという。祖父の帰藩後、何十年ぶりで再び東京に戻ったその胴が、叔母の事情で売られることになったものの、蒔絵も何もない烏胴ゆえ

になかなか買ひ手がつかない……というのが「継三味線」であり、祖父の生前に松吉の叔父（中田孫惣がモデル）に譲られ、叔父の死後間もなく望まれて笛の家に渡ったとする「新通夜物語」とは設定が異なるが、おそらく「新通夜物語」の方がより実際に近いと考えられる。というのは、鼓胴が譲られたというその家には明確なモデルが存在するためである。

鏡花の母方の実家である中田家については、これまでは主に江戸からの帰藩後の動向のみが把握されていたが、金沢市内の旧家で確認された多くの文書によって、中田家の帰藩以前の事跡が明らかになった。その文書とは江戸在住時の中田猪之助との往復書簡であり、そのやりとりの相手こそが同じ葛野流の大鼓方として交流が深かった金沢の町役者・飯嶋六之佐である。飯嶋家は享保年間から約二八〇年にわたって金沢で家芸を守り続けている大鼓の家であるが、能楽を専業としていた御手役者である中田家とは異なり他に手に職を持つ兼芸の町役者であった飯嶋家でも、幕藩体制の崩壊で扶持が打ち切られた影響は大きかったとみられ、その貴重な文書を集めた『大鼓役者の家と芸―金沢・飯島家十代の歴史―』（長山直治・西村聡編 飯嶋調寿会発行）には（飯嶋家では維新後、蕎麦屋「阿南田野庵」を営んでいた）とある。（阿南田野庵）即ち〈あなたの庵〉であり、「新通夜物語」に描かれた笛の家のモデルである。店名まで明かしながら大鼓方を笛方に置き換え、飯嶋家が代々在藩の町役者であったにもかかわらず中田家と同じ江戸詰めの家としたのは、モデルへの鏡花なりの配慮であろう。

飯嶋家の談によれば、〈阿南田野庵〉は現在の金沢市丸の内の尾崎神社の向かいに位置していたという。尾崎神社は、もとは金沢城北の丸で創建され、徳川家康を祀るために東照宮あるいは権現堂と称された社であり、その荘重さから北陸の日光とも呼ばれたほどだったが、維新後、尾崎神社と名を改め、また城内が陸軍省の管轄となったため、明治十一年に現在地に移転した。元地である北の丸の北側には藤右衛門丸があり、そこは地誌（注9）にも〈老樹古木、鬱蒼トシテ繁茂シ、轟々トシテ天ヲ摩シ、日光ヲ漏ラサス、殆ト深山幽林ノ観アリ、鳥鵲ノ栖家タリシナリ（金沢ノ童謡ニ「鳥何処へ行ク、権現堂ノ森へ、門ノ閉マラヌ其ノ前ニ、ハツハツハツト飛ンデ行ケ」ト云ウアリ。蓋シ其ノ実況ヲ、写シ得タルナリ）〉と記された場所であった。これは、〈高い処に可恐く樹が茂つてね、権現堂の森と云ふのさ。／（鳥早う行け権現堂が閉る。）／それ、晩の寂しい時唄つたものだ。知つてませう。一方藪畳で、旧藩何代かの頃、誰とか婦を蛇責めにした所で、今でも其の蛇が残つてうよく／＼居るなんて言ひ伝へる。飛々に家があります。其処を藪の内とか言つた〉という「新通夜物語」の記載と地理的にも一致し、また引用された童謡も酷似していることから、「新通夜物語」の〈あなたの庵〉には実際の〈阿南田野庵〉とその周辺のイメージがかなり忠実に写されているとみてよいだろう。

飯嶋家文書に早くに言及していた山森青硯氏は、中田家について〈蒐蔵した名筒はことごとく四散して搜すよすがもない〉（注10）として「新通夜物語」を例に挙げているから、鳥胴を譲り受けた能

楽師のモデルにも思い当たっていたかもしれない。現在も大鼓方として活躍を続ける飯嶋家には由来不明の烏胴がいくつか所有されているというが、その中に中田家ゆかりの鼓胴が存しているかどうかは不明である。管見の限り、鏡花の文章に飯嶋家所有の猪之助書簡に触れたものはないので、鏡花自身はこれらの資料の存在を知らなかったと思われるが、飯嶋家と深いつながりがあったこと、またその縁で鼓胴が譲られたということについては何らかの形で聞き及んでいたであろう。あるいは、金太郎の死に際し、集まった親類縁者の間で実際に話題とされた可能性もあるが、残念ながらそれを確かめる術は今はない。

三、燃える城

ところで「新通夜物語」には、鏡花の近親との思い出にまつわる気になる記載がもう一つある。それは、松吉が権現堂について語った前引の箇所が続く次のような言葉である。

「……(略)……城の櫓下だから路は広いけれど、渺として、河原のやうで、人通りの無い処さ。森の中に城の門が巍然として塔のやうに聳えて居たがね、……一冬大雪の積つてる中で、此が焼けたのを知つてよ。……蒼みがかった紫の火のひらめくのは雪が燃えるんで、萌黄の炎の搦むのは軍用に葺込んだ屋根裏の銅が焼けたんだつてね。屋根も山も一面に真白で、然も朝日

の晃々と輝く中で、宛然虹が焼けて狂つてるやうだつて、奥二階の小窓から、視機関を見るやうに、母さんに抱かれて見たよ。もう直きに花が咲きますよ、と母さんが言うたのを覚えて居る。」

「まあ、松さん、そんな事より鼓は何うしたのよ。」

お米に一蹴されて終わる旧城の火事の記憶は、作品のストーリーとは直接かわらないゆえに、かえってその意義が注目される。松吉の母と火の縁については、「新通夜物語」の中で既に次のように語られていた。

「何故かね、余程、それが目に着いて居たと見えて、あと二三年経つてから、下町の方に火事があつて、小児の弥次め、山の手から飛出して、あの高台の神社の中を近道で駈抜けた事がある。」

月はあつたが薄暗い晩。……境内に梅がある、其の咲いた時間で、中にも紅梅が一株、真盛に咲満ちたのに、——火事は遙に目の下の川岸の遊女町だった。——其の火が颯と、其の紅梅にばかり輝くやうに映つて、緋の色とも何とも美しいつたらない。火事を見ると、綺麗だね、と私を抱いて居て母さんの言つたのを忘れない所為か、其の紅梅の燃えるやうなのを見ると、茫乎と成つて凝視めて立つた。……(略)……(注11)

このように、「新通夜物語」では、「母」と「火」の縁について二度にわたって言及されている。しかし、鏡花作品において「母」の思ひ出が「火」のモチーフとともに描かれる例は、実はめずらしくない。既に田中励儀氏が精査し、指摘されているように（注12）、鏡花は地誌類にも登場する名所であり、多くの金沢市民に親しまれながら（明治廿三年二月廿三日午前十一時頃遊山客の焚火によつて焼出し、廿四日午後一時に至つて全く灰燼に帰した）（注13）名木・卯辰山一本松を「懐かしい母のイメージと一体化している」ものとし、「亡き母の象徴」として描いてきた。一本松が登場する作品としては、発表順では「照葉狂言」（明29）をはじめとして「鶯花径」（明31）「小春の狐」（大13）などがあるが、なかでも「鶯花径」には鏡花をモデルとする主人公の少年が「何時だつたか、其の焼けたのは」と焼失時の記憶をたどり、

ちやうど病氣でおよつていらつしやつた母様が私を抱いて起きて出て、二階の北窓を開けなすつた。（略）唯見ると、頂に小さな松明、まるで炎なのが中空に燃上がつて、左右の山の土は赤く、うらの峰は真黒で、麓の熊笹の枯れたのもありくと見て取られたあかるい中を、手の細い、白いので指さして、——（坊や、きれいだね。）とおつしやつた。——

というシーンがある。しかし、明治十五年に死去した母鈴が明治二

十三年の一本松の焼失を目にすることはあり得ない。これについて田中氏は（明治二十三年二月といえ、鏡花が作家を志して上京する数ヶ月前であり、それだけに一層故郷の思ひ出として強烈な印象を残したのではないだろうか。）と、亡き母の象徴として一本松が形象化された過程を推測されており、またかつて拙稿でも「亡き母の形代であつた一本松の美しい終焉の姿を母自身が見届けるというパラドックスで、思ひ出の木の無残な最期を自身の理想とする形に昇華し続けた」（注14）と、その時系列の矛盾を意味づけたことがある。

しかし、「新通夜物語」で描かれた「母」と「火」のモチーフの対象は、それまで繰り返し描かれた卯辰山一本松ではない。「城の門」（軍用に葺込んだ屋根裏の銅）などの言葉から、それは明治十四年一月十日の旧金沢城の二の丸殿閣の焼失を指すと思われる。市史類に拠れば、この日の午前二時頃、旧城内に設置されていた名古屋鎮台管下第七連隊本部より出火した火は、折からの北風と三尺余りの積雪により消火がはかどらず、結果連隊本部及び兵舎に充てられていた旧二の丸は焼失した。松吉が「一冬大雪の積つてゐる中で、此が焼けたのを知つてゐるよ」と語つたように、この年は（北陸地方は例年になく大雪で、越中五箇山では村内で一丈五尺余、山路で三丈余に及び、十七、八年来の大雪だという。（中略）金沢では積雪四尺余に至り、つぶれた家もでており、犀川川上の演劇場もつぶれた）（注15）と報道されるほど例年になく大雪であつた。このようななか、焼失した金沢城については、次のような記述もある。

明治十四年一月十日ノ火災ニ、金殿玉楼ハ勿論、此ノ金城湯池ノ誇リトセシ城櫓・門塀・殿閣・一字ヲ残ラス悉皆烏有ニ帰セシハ、幾度繰リ返シテモ可惜。当時東京府下ヲ初メ、全国有名ノ新聞紙ハ、一斉ニ其ノ焼失ヲ痛惜シ、就中報知新聞ノ如キハ、其ノ紙上ニ、金沢城及ヒ諸殿閣建物ハ、用材ニ檜・樺・梓ノ良材ヲ用イ、実ニ規模壯大結構ヲ極メ、維新前大建築トシテ、僅カニ此ノ建物ヲ余スノミナリシモ、一朝烏有ニ属シ、惜シミテモ余リアリ云々ト記セリ。(注16)

これほどまでの大事件に、幼少期の鏡花が無関心でいられたはずは無いだろう。

藩政時代の象徴ともいえる城が無惨に焼け落ちるさまを、母に抱かれて見たという松吉。(朝日の晃々と輝く中で、宛然虹が焼けて狂つてるやう)だという火焰を目にして母が(もう直きに花が咲きますよ)と言ったという記憶を、松吉は何故さほど必然性もないような流れの中で語る必要があったのか。

明治十四年は母鈴の死の前年にあたる。金沢城焼失後の同年十月十九日、鈴の父である元加賀藩御抱能楽師・中田豊喜が城に殉ずるかの様に七十四歳の生涯を閉じた。そして翌十五年の母の死。もし、「新通夜物語」と同じように鏡花が母の死の前年に城を焼き尽くす炎を見ていたとしたら、それは彼女にとって生涯忘れたい経験であつただろう。

伯父金太郎の死によって呼び覚まされた鏡花の能楽師一家としての記憶は、それまで〈母〉の象徴たる卯辰山の一本松に置きかえて美化し続けた火焰とそれを見つめる母の姿を、これまで通りに虚構化し得ないまま表出しなければならないほど、強い力を持つて彼を突き動かしたのだろうか。いわゆる金沢人氣質を敬遠し、時には郷里に対して厳しいまなざしを向けながらも、そのシンボルであつた城を――しかも既に灰燼に帰していたにもかかわらず、在りし日の城の姿をしばしば作中や装丁に登場させた鏡花。現実と虚構の間を揺れ動きながら、読む者を探索の迷路へといざなう「新通夜物語」は、ひよつとしたらこれらの鏡花世界の原風景を解き明かす糸口であるのかもしれない。

注

(1) 鏡花には「新通夜物語」以前に「通夜物語」(明32)がある。両作の関連性については、現行の「通夜物語」では〈宗偏流の茶の湯の名家〉と設定されている(久世友房)が、初出では〈当今屈指の謡の名人〉(観世友房)と能の家に設定されていたことが、吉田昌志「泉鏡花作『通夜物語』のかたち」(『女性文化と文学』御茶の水書房 平21・3)で指摘されている。

(2) 本誌掲載の「泉家系図」参照。なお、村松定孝氏は『泉鏡花事典』の同作の作品改題において(お組は鼓の家金太郎の姪で、金太郎の生家中田家の三女きん(金太郎や鏡花の母鈴の妹)の娘に当たる人の薄幸を写したものかとも思われる)と記しているが、お組が中田惣

之助(孫総)・ちよ夫妻の長女・中田ふみであることは明らかである。

(3) 東京(品川)の代表的な斎場・火葬場。

(4) 『新編泉鏡花集』別巻二(平18・1 岩波書店) 参照

(5) 後藤宙外宛書簡(明37・12・25付) 泉鏡花記念館蔵

(6) 実際の帰藩は慶応四年と見られる。

(7) 「新資料紹介」(「鏡花研究」創刊号 昭49・8 石川近代文学館)

(8) 『海の鳴る時』―鏡花文学の出発点・辰口―(「鏡花研究」第十一号 平19・3 石川近代文学館)

(9) 氏家栄太郎『金澤市街 温知叢誌』(平11・1 北國新聞社出版局)

(10) 「中田万三郎」(「謳舞往来」 昭38・11 さざれ会)

(11) ここでいう(川岸の遊女町)の火事は、松吉が十一、二の頃の記憶からさらに(二三年経つてから)とあるから松吉が十三、四の頃となる。モデルである鏡花の在郷中の遊女町の火事としては、明治十三年四月十四日の金沢市石坂町の西新地の火事―通称・新地焼けが最も近い例としては挙げられるが、明治十三年にはまだ七歳だった鏡花の実年齢とずれがあること、また(火事を見ると、綺麗だね、と私を抱いて居て母さんの言つたのを忘れない)という記述が母の死後を思わせるのに対し、この火事が鈴が亡くなる二年前、つまり生前の出来事である点で齟齬がある。

(12) 『雪柳』考―本松の形象をめぐる―(『泉鏡花文学の成立』平9・11 双文社出版)

(13) 『改訂増補 加能郷土辞彙』(昭31・8 北國新聞社)

(14) 「火事の記憶―『火のいたづら』を読む―」(「鏡花研究」第十二号 平22・3 石川近代文学館)

(15) 『実録 石川県史』(平3・1 能登印刷出版部)

(16) 氏家栄太郎前掲書

[付記] 本稿は第239回 鏡花研究会(平22・8・28 於・石川近代文学館)での口頭発表に基づくものであり、小林輝治氏・小林弘子氏・山内麻衣子氏には貴重なご教示を賜った。記して感謝したい。